

筋ジストロフィー

新化合物で進行を遅延

全身の筋肉が萎縮し動けなくなるデュシャンヌ型筋ジストロフィー(DMD)の進行を、特定の低分子化合物の投与によって遅らせることに、神戸大などの研究グループ(代表・松尾雅文神戸大名誉教授)が、患者の細胞実験で成功した。治療薬の開発に役立つ成果という。11日付の英科学誌ネイチャーコミュニケーションズ電子版に発表する。

神戸大などのグループ

DMDは、筋肉を維持するタンパク質「ジストロフィン」が失われる遺伝性の疾患。松尾名誉教授らはこれまで、ジストロフィンタンパク質の産生を促すこの働きをするタンパク質の注射治療で、運動機能が向上するなど一定の効果を実証した。しかし、高分子化合物が体内に吸収されにくい欠点があった。

神戸大大学院医学研究科の竹島泰弘特命教授は「低分子化合物で成功したこと、将来的に内服薬開発に期待が持てる」としている。

今回、同様に効果が見込

(岩崎昂志)